

「文化財」

私たちの町には、歴史的財産や伝統芸能など、長い年月を経て受け継がれているものがあります。

みなさん「文化財」という言葉を聞いたことがあると思います。文化財は、大きく分けると「有形文化財」「無形文化財」「民俗文化財」「記念物」の4つに分かれています。またこれらの中で重要なものは「国宝」や「特別天然記念物」として指定・選定されています。現在、大成区都地区で貴重な遺物などが残っていることが確認され、発掘作業が進められています。身近に歴史的財産が出土されていること、そして「文化の秋」の季節である今「せたな町指定文化財」についてご紹介します。

1 「兜」は父の形見。名人「明珍信家」の遺品である。

この兜は、丹羽地区開拓の祖といわれた丹羽五郎氏が家宝として秘蔵していたもので、昭和60年（1985年）に丹羽五郎氏の孫、丹羽松子氏が広く郷土の遺産として町での保存を望み寄贈したものです。



丹羽家は代々、福島県大沼郡野尻村（現昭和村）で代官を務めており、丹羽五郎氏の父、族氏が、明治2年の戊辰戦争で亡くなるまで、実際に使用していた兜です。この兜は族氏が攻めてくる敵をかわすため城にたてこもる際、部下により住民に預けられたもので、後に返却され丹羽家の宝として伝えられてきました。

ちなみに：丹羽五郎さんは、丹羽地区の発展に大きな功績を残したことから、北海道開拓功労者として表彰されています。また、入植する前は東京神田和泉警察署長をやっていたという経歴も持っています。皆さんご存知でしたか？

2 「青い目の人形」

大正15年（1926年）、アメリカから親善人形「青い目の人形」を贈られる事業が始まり、日本へ11万9700体、北海道へは643体贈られました。太櫛小学校に保存されていた青い目の人形「ルイーズ・アルコットちゃん」は、昭和2年5月18日に到着しました。



平成19年3月現在、北海道に贈られた643体のうち25体が発見されています。（みやぎ「青い目の人形」を調査する会」による調査資料）その中で一番保存状態が良いとされるのが「ルイーズ・アルコットちゃん」です。

国際交流の立場からも貴重な財産となっています。

「兜（明珍信家作）」

この兜は、丹羽地区開拓の祖といわれた丹羽五郎氏が家宝として秘蔵していたもので、昭和60年（1985年）に丹羽五郎氏の孫、丹羽松子氏が広く郷土の遺産として町での保存を望み寄贈したものです。

4 「阿波浄瑠璃人形」

町並みとして形が見えてきた明治30年（1897年）ころ、厳しい生活の中で娯楽として生まれたのが「真駒内浄瑠璃一座」です。入植者の中に三味線の弾き語りや人形遣いとしてプロ級とい



われた、西亦広蔵・貞蔵兄弟がいたこともあり、淡路島で経営の行き詰った人形座から人形40体一式を買い取り一座を結成し、仕事のかたわら興行したと伝えられています。

5 「荻野吟子の遺品・資料」

日本女医第1号となった荻野吟子氏は埼玉県妻沼町（現在熊谷市）の裕福な農家の五女に生まれ、18歳で結婚。しかし、この時不幸にも夫から性病を移され離婚しました。その治療で女医の必要性を痛感し、医師になることを決意しました。



明治の封建的社會で女性が医師になることは至難の業でしたが、女性の医師開業試験の道を開き、35歳で見事に試験に合格、東京で開業し、日本で初の女性医師が誕生しました。

6 「南川遺跡出土の遺物」

北海道から埋蔵文化財として指定を受けた南川2遺跡の遺物は高い評価を受けています。土館に展示されています。



せたな町文化財保護審議会議長 佐藤 信人 さん (北檜山区丹羽)

文化財は、永い歴史の中で、私たちの祖先が創り引き継いできた文化的な遺産であり、故郷の歴史を探る上でとても価値の高いものです。ですから、これを大切にし、広く活用していくことで町民皆さんの身近なものとして溶け込んでいき、新しい活力に満ちたまちづくりに役立っていくものと思っています。

私は、「歴史文芸研究会」を主宰し、『歴史文芸研究』誌を年4回発行しています。事実に基づき書いていますので、稚内から沖縄まで全国あちこち行きました。特にシリーズ化している「丹羽五郎その光と影」の連載と、玉川水仙のルーツの調査では、歩きました。

調べていくなかで、疑問が解けないまま数年が経ち、遂にそれが解けたときの喜びは、何物にも代えがたいものがあります。これこそ「歴史を探求する者の幸せ」です。